
異世界でシムシティ。

金乃りん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でシムシティ。

【Nコード】

N64920

【作者名】

金乃りん

【あらすじ】

お約束のように交通事故で死に、気がつけば生まれ変わっていた俺。

異世界トリップというやつだ。

ああ、信じられない。

そして始まる、領主生活……。

チート能力を何一つ持っていない元サラリーマンが必死であがきながらひとつの島の民と心中覚悟で繰り広げるシムシティ。

スタートはお約束から。

ドンという衝撃に、あれ、と暢気なことを思えたのは、一瞬だった。

全身を貫く激痛。

ガンガンと割れるようにいたい頭。

体のどこもかしこが痛いのに、どこかに切り離されていくような、遠い感触。

あ、やべえ、死ぬかと思った。

俺、跳ねられた。

ふいに、激痛がすうっと引いていく。

かわりに、寒さが襲ってきた。

全身ががたがた震えるんじゃないかってぐらいの、寒さ。

頭の芯ががしびれて、あ、これ本当にやばいと、まるでひどいことのように思った。

誰かがなにか騒いでる。

そんな声を遠くに聞きながら、俺の意識は消えていった。

意識が戻るといふのは、目が覚める瞬間に似ている。

ふわふわとした感覚がだんだん冴えていって、身体が自分の指示にしたがうようになっていく。

ってことは助かったんだなと思って開いた目に映るはずなのは、病院の白い天井……な、はずだった。

はずなのに、ない。

というか、なにもない。

辺り一面、灰色一色だった。

ってというか灰色って不景気な色だな。

なんだこれ。

可能性1。死んだからここは死後の世界。

可能性2。起きたつもりでまだ寝て夢を見ている。

可能性3。俺は選ばれたなんちゃらで神様から指令をだされちゃったりする身である。

「……なんてばかばかしい」

そんなご都合主義あつてたまるか。

大昔に読んでいた漫画ではそんなことがあるかもしれないが、現実にあつたら怖いし、そういうことが現実にあるものだと思っている人がいれば、目を覚ませと肩をたたいてやりたい。

人間、そんな夢物語の中で生きていられるほど人生楽じゃない。

「目覚めましたか」

「うん、夢だ。寝よう」

もうちょつと寝たら目が覚める。

「急なことで戸惑っているかもしれませんが、あなたは……」

今日は大事な会議があつて、遅刻できないんだ。
なにしろお茶当番だからな。

お茶を煎れるために人を雇うなんてとんでもないとかいいつつ、おいしいお茶を煎られるかは社会人としての基本だとか何とかいって、煎茶の家元とやらに講習会まで受けさせられた初任者研修。

しかもテストするように会議のたびに持ち回りでお茶を煎れさせられるのだ。

「……なので、あなたには生まれ変わっていただき、再び人生を送っていたきます」

「おやすみなさい」

「こちらとしてもお願いするのですから、あなたの願いをなんでも一つかなえて差し上げましょう」

「おいしいお茶が煎れますように」

「おいしいお茶を煎れる能力ですね？わかりました」

さあ、さつさと夢から醒めて会社にいくか。

「それだけでは申し訳ありませんね……少しだけ付け足しをしておきましょう」

目を閉じて、寝やすいようにくるりと丸くなる。

「ではお気をつけて。頼みましたよ」

おれの意識は、ゆっくりと闇に沈んでいった。

まずは平凡な人生がスタートした・・・のに。

そうして、俺は猛烈に後悔していた。
なんだってこんなことになってんだ。

まさかあの夢が本当だったとは思わなかった。
まったくの夢だと思って何も聞いてなかったのが本当に悔やまれる。

もつと役に立つ能力をもらうんだったとか思っても後の祭りで、
しかもこんなありえない設定にされるとは露ほど思っていなかった。
目の前の鏡に映っている、お人形のような少女の姿に思いつき
ため息をつく。

残念ながら赤ん坊の頃の記憶はない。

だいたい自我に目覚め始めた5歳ぐらいの記憶からがぼつぼつと
あるぐらいだ。

少なくともおむつを替えられたり、授乳された記憶がないのは大
変望ましいことである。

おかげで勉強が始まることには言葉もわかったし、文字も読み書
きできるようになっていた。

明らかに日本語とは違うのだけれど、乳幼児の脳みそってすげえ、
と思った。

が。ひとつだけ強烈な記憶がある。

鏡に映った他人の……しかも超かわいらしい外国人の女の子が自分

だと悟ったときだ。

あれはもう、すべての価値観がひっくり返るかと思った。うん。そして思いっきり泣き喚いた。両親はもちろん、周り中の大人がぶつとんできたもんだ。

鏡の中には、ふう、と物憂げにため息をつく美少女。

自分だとはどうしても思えない。ああ、まったく思えない。

髪は白髪とは明らかに違う白金だし、自分が瞬きするたびに揺れる視界に若干邪魔なふっさふさのまつげも白金だし、顔もどこかしこも整ってて怖い。

まあ、中身があまり性格よくないからそのうちゆがむだろう。うん。

人の心は顔に表れるとはよく言ったもので、中身の生活環境や性格つてのは本当に現れる。

きっと顔の筋肉でもよく使う部分とか、ゆがんだ形がちょっとずつ記憶されて定着するんだろうなあ。

願わくば笑いじわのいっぱいあるじいさんになりたいもんだ。

そう。見た目は美少女、中身は美少年。

なんということでしょう。美少女は、男の子だったのです。

……人生つてままならねえよな。

おかげでご近所のマーくんには告白され、お隣のタツくんはマーくんを恋敵だと思って喧嘩し、男だとわかると今日から女になれとむちゃくちゃを言われた。

道を歩けば変質者を釣る。

そんな物心ついて以来8年、合計12年の人生。前の人生もいれるともう40超えた。

まあ、見た目がどうあれ男でよかった。

これでついでるものがついてなかったら俺はどうしていいかわからなかった。

「フロルちゃん！ん！」

廊下から聞こえるなんともかわいらしい声はわが愛すべき母親のもの。

だが、断言してもいい。元の母親のほうが数倍ましだ！！

前の母親…おふくろは基本放置だった。

悪いことしたときは親父にもお袋にもぶん殴られたし、やっていいことと悪いことはがつつり叩き込まれた。だが、それ以外はあなたの好きにきなさいが基本方針だった。

今の母親はそれこそ180度違う。

甘やかし放題、べったべた。

隙あらばくつついてくるし、学校も離れたくないから行かせないとこねるし、息子を私の天使ちゃんとか呼んでお願いなんでも聞いてあげる、とか言い出すし、服から物から頼んでもいないのにごっそり買ってくる。

よくもまあここまで散財するもんだというぐらい、俺の部屋には高そうなものが山とある。

俺だって、前の世界で鉄拳教育受けてなけりゃ、性格まがろつつてもんだ…。

「なんですか、お母様」

「まあ！フロルちゃん！お母様とお茶をしに参りましょう！」

きゃーんとかいう甲高い声と共に部屋に入ってきたのは…うん。見た目は俺とそっくりです。

ただ、こつちのほう化粧濃いけどね。

この美貌だけで見初められた人だ。

「すみません、今日は読みたい本があつて…自分で勉強しなければ、みんなに置いていかれます」

「あらあ、フロルちゃんはお母様に似てかわいいんだから、勉強なんかしないでいいのよう？目が悪くなったらきれいな顔が台無しになっちゃうわ」

ひくつと顔が引きつる。

俺にフロルちゃんとかいうふざけた名前をつけたのはもちろんこの人だ。

フローラじゃなくてよかったというべきか、そもそも男に“お花ちゃん”なんて名づけるなというか。

まあ…この困った母親と名前と顔をのぞけば、おおむね恵まれた生活をしている。

なんと、王族のすみっこに生まれてしまったらしく、父親は先代の王の末っ子の孫で、臣下にも下り損ね、婿入りもし損ねたために分家してもらったという曰くつきの正真正銘王族の末席だったりする。

身分もある。金にも困つてないし、勉強もそれなりに（あくまでそれなり、だが）理解できる頭に恵まれ、顔も…まあ、問題はあるものの整っている。運動神経も悪くない。

不満を言ったら罰が当たる。

そんな、平々凡々な日々を、怠惰にすごしていた12才俺だった。

とはいえもちろん、あんなお約束な始まり方をした以上……次のお約束がやってくる。

俺の家が謀反の罪とやらに巻き添えをくって取り潰されたのは、それから１年後だった。

そして始まる逃亡生活

俺は、両親が処刑されるのを、黙ってみていることしかできなかった。

謀反…国家転覆は一族郎党処刑と、昔から法で定められている。だからこそ、父は俺を逃がした。

部下に命じて一人だけを脱出させて…捕まった。

街中にはまだ俺を探す兵がいる。今日のこの処刑を見に来るのは、とたくさんの兵が出回っている。

幸運だったのは、社交界にデビュー前で、さらに母の意志で学校にも通っていないかった俺は、顔をそれほど知られていなかったことだろう。

こうして、少女の格好をしてしまえば、男の子を捜している兵の目など簡単にごまかされてしまいうらい…の、顔だった。

地下通路から逃げ出して、母に着せられた地味な女性用ドレスに、染め粉で髪の色を変えて街中にまぎれた。都は人が多い。だから、少女一人で旅をしているのは不思議でも、買い物に來たり、街中を歩いているのはそれほど不思議でもない。

処刑までの10日間、農家の軒先や町外れの小屋を借りて少しだけ眠って。

父が持たせてくれた銅貨で食事をした。

着ているうちに地味なドレスは汚れ、ますます街中に紛れ込みやすくなっていく。

きつとあと数日で、スラムに紛れ込むことができる。

あそこは危ないけれど、金を払えばなんでもするのもあるから。目的の地まで、きつと送ってもらえる。そう思った。

最後に、自分が両親と呼んだ人間たちを、しっかり見ておきたかった。

その死に様も、すべて。

本当なら、穏やかに息を引き取るのを見送ることになるはずだろうに。

そう思いながら、処刑を見守る人々の真ん中で、俺は心の中で両親の冥福を祈った。

吹き上がる血と、転がった首。

飛び出た目も、だらりと伸びた舌も、生前の姿など思い出すことも難しいぐらい醜かった。

吐き気がする。

これは、人間として当然の反応だ。

死んだ人間を見たことがない。臨終と告げられた後の静かな死に顔か、棺の中の眠るような顔しか、俺は見たことがない。

だからこそ、強烈だった。

ずしゃつと、首を切り落として地に打ち付けられたときの音が、いつまでも耳の奥に鳴り響く。

悲鳴のような母の声。

一言も発せず、前を見つめた父の顔。

無残な、死に顔。

すべてを覚えておこうと思った。

この国を出たのは、それからすぐだった。
頼ったのは船だ。

スラムから地を行けば、金を狙うやつらに狙われるのは目に見え

ていた。

それよりも、身寄りを失って遠縁を頼ることになった娘を演じた方が早いと思ったのは、食事を買に行った場所でたまたま人のよさそうな船乗りを見つけたからだった。

両親が病で死に、一人残された娘が遠く異国の親戚を頼って船旅をする。

少ない荷物ながら、汚れをできるだけ洗って、人気のない森の中で身体もこっそり清めた。

荷物は家を出るときに父が持たせてくれたお金といくつかの宝飾品と、身分を証明することができる手紙と印章。あとは…地図と筆記用具と、この世界では貴重な本だ。

紙がそれほど普及していない世の中で、無地の紙を大量にとじた一冊のノートは俺が特別に作ってもらっていたものだ。

今まで学んだ世界の仕組みや経済、雑多なことがメモしてある。

まだ半分以上は白紙だから、これだけは持っていきたかった。

紙は貴重品だから、遺産と思えばそれほど不思議ではない。

宝飾品や高額な金貨はカバンの中に縫い付けて隠して、わずかな銀貨と銅貨で乗せてほしいと頼んだ俺を、船長は快く乗せてくれることになった。

目的地は島。

チャルラタンと呼ばれる、小さな隣の国の、島だった。

チャルラタン島

チャルラタンは小さな島だ。

ひなびた田舎で何もない。

けれどそこには、昔、父に仕えていたという引退した騎士が住んでいるはずだった。

彼が安全なところまで連れて行ってくれる。

父はそう言い残した。

船の中はしごく快適だった。

12歳の少年は基本、同年代の少女たちより身体が小さいし発達も遅い。

だから俺は10歳という設定にしてもぐりこんだ。

これでも相当な無理な年だが、やむを得ない。

だが、迎えにも来てもらえなかったかわいそうな娘という触れ込みは思った以上に効力を発揮し、船にのって2日で俺はあちこちのおじちゃんおばちゃんにいちちゃんねえちゃんばあちゃんじいちゃんのアイドルとなり、山のようなお菓子と食事を貰いでもらえるようになった。

楽だ。

もちろん、この美少女な外見が手伝っていたのは言うまでもない。船のコックなどは俺を手伝いと称して厨房に置きながら、いろんなものをつまみ食いさせてくれたし、船長も色々と声をかけてくれた。

ありがたいありがたい。

色んな話を聞きつつ、たどり着いた先の島は…本当に小さかった。大丈夫かこれ。波きたら飲み込まれんじゃないのか。

「さ、島の南側に港がある。そこで君をおろすよ」

「ありがとう、船長さん」

かわいく笑うとでれつと顔が崩れる。

気持ち悪い。

いや、これが本当に10歳の少女だったらさして問題はないんだ。中身が40の親父だからなあ・・・
身体も男だし。

「気をつけて。気を落とさずにがんばってな」

「はい、船長さん。ありがとうございました。みなさんにありがとうって伝えてください」

「おう」

涙をにじませながら手をふりつつ去っていった船長さんはやっぱり見込んだとおりいい人だった。

おかげでわずかとはいえ財産も奪われず、そのまま。

正体がバレて殺されることも免れた。

ふつと脳裏に地面に転がった父の顔がよみがえり、振り払うように首を振る。

うなされたのは、一度や二度じゃない。

傷ついたのは、死に顔だけじゃない。

転がった首に悲鳴をあげて遠ざかりながら、興味深々に覗き込んでいた人々も、だ。

そして…それをなれた手つきで扱う首切り役人と…まるで、おもちゃのように串刺して笑った兵士の、顔。

人間はあんなにも残酷になれる。

その相手が自分の両親だっただけに、この傷は当分なくなりそう

もなかった。

こんなとき、大人でよかったと思う。

本当に子どもだったらトラウマ決定だ。

あの場で泣き叫んで一緒に仲良く殺されていただろう。

少なくとも…自分は、時間が解決してくれることを知っている。

吹き付けてきた風にぶるりと震えてから、ずいぶんぼんやりとここにたっていたのだと気づく。

沖にあつた乗ってきた船の姿はすっかり消えていた。

「…いくか」

もう慣れたふわふわのペチコートを揺らしながら、よいせつと立ち上がった。

父の知り合いだという騎士に無事に会えることを願いながら、港がずいぶんと豪華な作りであることに気づいた。

大型の船が3隻は泊まれる。

さっきもボートできたのは一人しか降りない港に停泊するのが面倒だっただけで本当は近くによることもできたのだろう。

ボートの発着場もあるし、小さな島のわりに裕福なのかと思うぐらい豪華だった。

「なんか無駄にきれいな飾り彫りもあるし」

だが、港はどこか閑散としていて、色々なものが古びて見える。

放置された木箱も明らかに腐っているし、綱もぼろぼろだ。

なんだかちぐはぐで首を傾げたくなる。

この港は決して古くない。あちこちの金メッキもやや黒ずんではいるものの、ぴかぴかしてる。

なのに転がっているものはぼろぼろ…人はいない。

「なんか…嫌な予感がするなあ…」

決して平穏な日々は待っていないさそうだ。

とりあえずは尋ね人を探そう、と足を進めるしかなかった。

「道、ないし…」

ふつつ、港から町までは道があるだろう。

なきやおかしいだろう。

そう思うぐらい唐突に、道がなくなった。

しばらくは続いていた石畳がなくなると同時に、きれいに道がなくなったのだ。

父よ。いざというとき頼る相手の所在ぐらいちゃんと確認しておいてくれよ。

「やばい…まさか無人島とか…」

このまま野宿か。そうなのか。

前は草木の生い茂った森。

後ろはただっ広い海風も吹きすさぶ港。

どうしようもない。

ここまできて八方塞とは。

「おんやあ？」

「えっ」

人がいた！とばかりに振り返った俺の目に映ったのは…。

目が、点になった。

「べっぴんさんが一人でこんなとこにどうした？」

「つきゃあああああああ！！！！！！！！！！」

手に血まみれの蛮刀を握り締めた上半身裸のもじやもじや男だった。

もじゃもじゃ星人

「ほれ、うまいぞ」

「けけけけけっこうです」

ついてこい、と連れてこられたのは、木々の間のわずかなスペースに建てられたテント。

だっについてこないとなにされるかわかんないと思ったんだもん！！

手に巨大な蛮刀だぜ？あれ振り下ろされたら一瞬であの世行き。しかも血まみれ。

なんか殺してきた帰りなのは間違いない。

そう思ったら、やっぱりそれは獣の血だったらしい。しかも巨大イノシシ。

「べっぴんさんはこんなもん食わないのかなあ」
いや、それ生だし。

腹壊しそうだ。

「食わないんなら……」

「お、おおお俺男ですからねっつ」

犯されるのかと思って思わず自分でバラした。

こんな男に押し倒されたら、それこそ一生もののトラウマだ。

ひげもじゃもじゃ。髪もじゃもじゃ。どっちもいつ切ったんだか

！！

胸毛ももじゃもじゃ…これは気持ち悪いです。

お前はもじやもじや星人かってぐらいもじやもじやだ。

われながら意味不明。

そのうえ、そのもじやもじやは血まみれで絡まりあってるのだ。

うわ、生肉食ったし！！

浅黒い肌はあきらかに日焼けだし、もじやもじやの間から見える顔はかなり人相が悪い。

山賊だったらどうなんだ。男なら用済みって殺されるのか。でも、いざって時にばれたらそれこそその場でこの世とお別れだよな。

お父様、お母様、意外と早く予想外の場所であなたたちの後を追うことになりそうです。

親父、お袋、結局おれ長生きできない体質だったんだな。

天国のじいちゃん、待っててね。

「べっぴんさん、村まで行くんだろう？送ってあげよう」
「へ？」

村まで、送る??

「この島には一箇所しか村はないから、そこのお客さんだろ？」

「た、たぶん…」

「日が暮れる前に送っていったやんないとな」

じゃあなんでここに寄ったんだ。さっき差し出した肉はいったい、
と思っていたら、山賊はよいせつとばかりに解体したイノシシの残
り半分を担いで歩き出した。

「ついで、べっぴんさん」

「ええと…」

「どした？」

「あの、俺は…食べられるんじゃない？」

「は？おらがべっぴんさんを？人間はまずいから食わん」

「………まずいから！？」

「やっぱり食べたことあるんじゃないか！！」

「そりゃおらは肉食だからな。食うなら人間でも食うさ。だけど今は食い物があるし、べっぴんさん、どこもかしこも肉なくてまずそうだからな」

「は、はあ…」

「ほれ、ついてこないとおいてっちまうぞ」

腹減ったら食うぞ、と付け加えられて、俺は慌ててその後を歩いていくことにした。

…村でも人間食ってたらどうしよう…。

「べっぴんさんは誰に会いにきたんだべ」

「はあ…テホン、という方にお会いしに…」

「テホン！？テホンってテホンじーさんかい？」

あ、やっぱり爺さんっていう年なんだね…。

「テホンじーさんかあ…そりゃあ…」

「………まさか、お亡くなりになってるとか」

「いやいや、死んではいないよ。でもねえ…見ればわかるだろ」

「いやあの、頼むからさ…頼むから、少しは両親死んだ痛みに浸らせてくれよ！なんだってこんなに次から次へと起こるんだよ！！両親殺されて、自分も生きるか死ぬかで、がんばって逃げ出してきたら…きたら、わけのわからないちぐはぐ島にもじやもじや男に頼りにしてきた爺さんはなんか曰くありげだし！」

俺はまだ12歳なんだって！！

これが15とか20とかだったたら俺だって金を元手にどっか違う国まで逃げ出して商売でも始めたり、なんか稼ぐ手段みつけない！12歳のいたいけな美少年じゃ働くところもないんだよ！

「ほれ、ついたよ」

めまぐるしく動く頭と同じように足を動かしていたら、いつしか

村とやらについていたらしい。

村を染め上げる夕日。

はしゃぐ子どもたちの声。

ごはんよ、と呼びかける母親の声と、帰宅を告げる父親の声。

あたりには食欲を刺激する匂いがたちこめ、食事の支度をする煙が赤く染まった空に上っていく…。

昔懐かしい曲が聞こえてきそうな牧歌的な光景だった。

「おーい」

「あ、ロボさん!!」

「ロボおじちゃんだよー!」

子どもたちの上げた声にわらわらと主婦であろう女性たちが家から出てきた。

「あらあら、今日はでっかいイノシシだねえ。もう料理しちまったよ」

「すまねえ、今日はずいぶん時間がかっちまってなー」

「みんなでもらつとくよ。いつもすまないねえ」

「今日は分けて塩ふつとくとしようかね」

「あたしは煮ちまって明日まで寝かせとくよ」

「ロボさんがすぐ水に浸してくれてるから明日までは持つだろうよ」
にぎやかな主婦に囲まれているイノシシ肉をぼんやりと見ていると、もじゃ男につつかれた。

「誰か、このべっぴんさんをテホンジーさんのとにつれてってやつてくれないかい?」

「テホンジーさんに?なんでまた」

「死んだ親父さんがテホンジーさんどこに行けといったんだとー」

「あれま、かわいそーに…」

「おじょうちゃん、他に親類はないのかい？」

それはどういう意味だろう。

もじゃ男にもいわれたが、

「テホンジーさん、すっかりボケちゃってねえ…」

…なんだとう！？

ただひとつ、わかっているのは

引き合わされたおじいさんは本当にボケていた。

しかも耳も遠かった。

とてもじゃないけど、父の話などできるわけもない。

がつくりと肩を落とす俺に、お婆さんたちが口々になくさめの言葉を言ってくれる。

でも、慰めにもなんにもなりやしない。

「あんた身寄りがないんだろ？ならこのままここに住めばいいよ」
「そうそう。あんたみたいな嬢ちゃん一人ぐらい村で養ってあげるよ」

決して裕福な村には見えないのだけれど、そういつてくれるのがうれしい。

頷いていつその村で平和に畑耕して…と思わないでもない。

だが、さすがに事情はそれを許さないだろう。

そもそも、自分が男だと話すのさえはばかられる。

なんで女の格好してたのか、とかいろんなことを突っ込まれるに違いないのだ。

それに答える言葉を俺はもたない。

「今晚は空家があるからそこに泊まるといいよ。明日の朝、みんなで相談しようかね」

「そうだね」

お婆さんたちがそういいながら食事の支度で忙しい最中案内してくれた空家で、俺は一人呆然とするしかなかった。

家は取り潰された。

両親は処刑された。

頼みの綱として父に残された騎士テホンはボケてしまっている。

そして——いまだにこの身はお尋ね者である。

ここまでくればなんとなる。

そう思っていた自分が甘かったのかもしれない。

だが、俺がいたのは、平和な日本。

この世界に生まれてからたった12年。それも、家の中に閉じこもっていた世間知らずだ。

知っているのは、家庭教師たちに教わった知識ぐらいで、こんなときにどうしたらいいかなど逆さにしても出てこない。

本当に……本当にこれはヤバイのではないかと思った。

見つからず、もし、もし追っ手がかかったら？

自分も、あんなふうに処刑されるのか。

そう思うと、齒の根が合わなくなる。

カチカチと音を立ててぶつかる齒がうるさい。

自分で自分の肩を抑えるように手を回しても、震えは止められなかった。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

まずい。怖い。

死ぬのは嫌だ。

捕まって拷問も嫌だ。

目から涙があふれて、視界がゆがむ。

死にたく、ない。

あんなふうに、首を落とされて、無残な姿をさらすのも、こんなところで死ぬのも嫌だ。

死ぬのは痛い。
死ぬのは暗い。
死にたく、ない。

とりあえず小休止

真っ黒だった空が次第に光をはらんで淡い色に染め上げられるのを、ただ見つめていた。

水分を取らなかつたせい、涙が途中から出なくなつた。

夜中に井戸を使うのも気がひけて、ぼんやりとしていた。

泣くこともなくなると、感情が動かなくなるものなのだ、と他人事のように思った。

今なら——死んでも辛くないのかもしれない。

でも、そういうわけにはいかない。

父は、生きろと言つた。

自分だつて逃げることもできたのに、俺を逃がすために、つかまつた。

自分まで逃げたら、追つ手に必ず捕まる。

そう言つて、笑顔で逃げ道の通路を閉めた。

だが、この事態は予測すらしていなかつたに違いない。

どうするか、頭も先行きも真っ白で、どうしたらいいのかさっぱりわからなかつた。

村の女性たちに促されるまま、顔を洗つて水と簡単な食事を取らせてもらった。

よほどひどい顔をしていたんだろう、気の毒そうな顔で、彼女たちは色々と気遣ってくれた。

かわいそうに、と言いながら果物を絞つたジュースも飲ませてくれたし、目元を冷やしな、と氷室からわざわざ氷を出してきてくれた人もいた。

どちらも、村では貴重品だろうに。

そんな気遣いがとてもありがたかった。

同時に、この村に長居ができないことも悟った。

この村に万が一追っ手がかかったら——村の人たちは親切に答えるだろう。少女の格好をした両親をなくした子がいることを。

ただでさえ目立つ容姿をしているのだ。そんな危険は冒せない。

「できるだけ、人の多い町……この国じゃ、なくて……」

そこまで考えて、頭を振った。

元からあんまりまじめに暗い話を考えるような頭の構造をしていないのだ。

なのに、昨日からこっち、ずっと暗いことばかり考えていて、気が滅入る。

「お嬢ちゃん、お茶は煎れられるかい？」

お茶、ときいて顔が引きつった。

「大丈夫です」

「本当かい？じゃあ、煎れたら村長の家に持っていっておくれ。そのまんま話をしてくるといいよ。最も、どのくらい役に立つかわからないけどねえ」

「わかりました」

大きな鉄瓶を受け取って中を覗き込むと、緑の葉っぱがたっぷりつめられていた。

そのあたりで取れた香りのする葉をまぜてお茶と呼んでいるのだろう。

お湯をそそぎ、なんとなくのタイミングでお茶を並べたカップに注ぐ。

お盆ごとそれを持って、てくてくと示された家に向かった。

中にいたじいちゃんばあちゃんに茶を出して、ぐってりと椅子に座り込む。

なんでこんなときにこんなことやってんだ。

そして村長さんって誰だろう。いっぱいいるし、なんかどつからどうみてもおじいちゃんおばあちゃんのおしゃべりするところだし。あれだ。デイケア。そんなかんじ。

ほんとになんでこんなところ来ちゃったんだろう。

というか、どうやってこれからすごそう。

なんだか、ほんわかしてるじいちゃんばあちゃんを見てると、悲壮な状況のはずなのに無性に脱力する。

まあいいか、とずずっとお茶をすすりあげた。

とってもおいしい。

……………無意味においしい。

そのおいしさがいつそ腹立たしい。

そう。あの能力である。

あの時にもらってしまった能力である。

ああ、なぜこんな役にも立たない能力をもらったのか。

こんなことならもつと頭が良くなるとか、喧嘩に勝てる力とか、魔法とか超能力といった特殊能力とか、いろいろもらったのに！

後悔先に立たず。

返す返すも悔しい。

お茶の煎れ方を教師から絶賛されたときにはた、と思い出したのは、あの最初の瞬間だ。

「美味しいお茶が入られますように」

確かに自分はそう言った。

ということとは、本当にアレは夢じゃなくて、そういう能力をもらってしまったのだ、と気づいた瞬間だった。

おもいっきり脱力したとも。ああ、したとも。

せめて・・・金を稼ぐ…金運をよくする、とか！

商家の裕福な家庭に生まれるとか！

百歩譲って美味しい料理が作れるとかだったら良かったのに！！痛いのも戦うのも辛いのもキライだから、俺の辞書に最初から戦いとか騎士とか魔法使いっていう選択肢はない。

本当に…美味しいお茶だけではなにもできないっつーに…。

ああ、やだやだ。

そんなことを思いながらすすった俺の耳に、とんでもない叫び声が聞こえてきた。

「なんじゃあこりゃあああああ！！！！」

「うまあああああいいい！！」

大丈夫か、爺さんたち。死ぬぞ。

突然叫んだりして。

「その娘っこ！娘っこ！これはお前さんが煎れたんか！？」

「まあ・・・そうですが」

「なんと！嫁にこい！」

「あらやですよ、おじいさん。あなた結婚してるじゃありませんか」

「そうじゃそうじゃ。ここはやもめのわしの・・・」

「わしは独身じゃからのー！」

…いや、そういう問題では、ないですから。

とたんに元気になったじいさんたちにとっても脱力した俺だった。

父の手紙

ようやくおちついたじいさまたちが次に言い出したのは要約すれば「おまえさんは誰かいの」ということだった。

そりゃあもう、全身の力が抜けきった感じでがつくりと膝をついたとも。

かくかくしかじか、と巧妙に作った涙ちよちよぎれる身の上話を語ってじいさまばあさまに説明する。

亀の甲より年の功。うん。そう信じよう。

「はあ…それでテホンじいさん頼ってここにきよったんかー」

「残念じゃったのー。ここ数年どうもおかしいおかしい思っておつたらついにボケてしもうて」

「前はしっかり者でそれこそずうっと村長さん役を引き受けてもらつてたんじゃがのう」

「あの頃は楽でよかったのう…」

いやだから、遠い目しないでよ。解決にならんから。

「どうせならここに住めばいいんじゃないかねえ？」

「そうそう。村の若い衆も美人が増えて喜ぶよ」

「私まだ12歳ですけど」

「あと3年もしたら嫁にいけるのー」

…嫁。

うわ、鳥肌たつたぞ。

ダメだ。本格的にこの島抜け出さないとダメだ。

「…嬢ちゃん」

今までだまーっていたちよつとまじめに見えるおじいさんが口を開いた。

「おまえさん、さっき親父さんが残した手紙って言わんかったか？」

「あ…はい」

たしかにテホンじいさん宛に預かって…

「あああああああああ！！！！」

そうだよ。この後どうするのかとか、書いてたかもしれないに！！

なんで父様の手紙を読むつてことに気づかなかったんだろう！

「こっそり読んで、また相談したいことがあつたら来るがいいさ」

「はい！」

鞆をひつつかみ、どたばたと飛び出した。

貸してもらった家に駆け込み、ごそごそと鞆の底に縫い付けた手紙を引っがす。

10秒後、俺の肩はがっくり落ちていた。

「そうだなあ。そんなうまい話があるわけないよな…」

手紙に書いてあったのは、頼む、という言葉とテホンの良いようにしてほしいという台詞。

そして、敵をとったり、復興しようなどと思うな、と言い聞かせてほしいという願いだった。

それ以外、なにも、ない。

そりゃそうだろう。あの短時間でささつと書いて渡して逃がしてくれたのだ。そんな暇なんかあるわけがない。

八方ふさがり。ぐうの音もでない。

結局、とぼとぼと元の村長役のたまり場（と呼ぶことにした。おむね正解だろう）に戻ってきた俺の目に映ったのは…テホンじいさんだった。

「おお！シャニエさま・・・！」

呼ばれたのは母親の名前だ。

もしかして、と淡い期待に胸をときめかせる。

彼は…ボケていなくて、なんとかしてくれる…？

「かわいいかわいいシャニエさま…！」

ぐげ。頬ずりするな。気持ち悪い。

「ほらテホンさん、あんまりやるとお嬢ちゃんがいやがりますよう？」

「ごめんねえ、ほんとにじいさんボケちゃって」

そそくさと引き離してくれたおばちゃんたちがテホンじいさんの手を引く。

「ごはんはまだですかいのう、とか言ってるじいさんは…やっぱりボケてんだな、これ。」

「元々この領主様に仕えてたのよ、おじいちゃん。ここの出身なんだけど。そのお嬢様が結婚されるときに付き添いで一緒に行っただんですって。年とって引退したとかで戻ってきたのよう」

あはは、と笑って教えてくれたことは、とても重要なことだった。まさか、ここは母の実家なのか。

すっかり断絶していたらしく、あちらの家で母の親族を見ることがなかった。

テホンじいさんは母の側仕えだった、ということか…？

なら、この領主に頼れば、もしかしたら、逃がしてもらえるかもしれない。

なにしろ、謀反人は発覚すれば一蓮托生。

母の実家で、しかもそこに俺が逃げ込んでるなんてわかれれば、問答無用で一緒に処刑される。

いわば運命共同体…！

「あの！ここの領主様の町にはどうやっていけますか！？」

どんぶらっっっ

面食らった村人さんたちはそれでもヒトがよろしかった。
すぐに船を出してくれた。

といっても、吹けば飛びそうな小船。

それで、まっつったく見えない本土に行こうというのだから、恐ろしい。

普通は1ヶ月に一回の定期船を待つらしいのだが、あと8日は先らしい。

8日…ものすごく微妙な日数だと思わないか。

仕方なく、船を出してもらうことにしたわけだが。

「…なんで、あなたなんですか…？」

「んー？」

もじやもじや星人再び。

「おらが一番船がうまいからだべ」

船がうまいって何語だ。

まさか船まで食うのか！？このひと。

「本土じゃあ、ちよつと遠すぎんべ。おらなら、泳いでも渡れるでの」

泳いで…泳いで！？

どんな化け物ですか、あんた。

「ロボさん、頼んだよー」

「嬢ちゃん、気をつけていつといで」

いや、あの、この人肉食だよね…？

船の上で、食べられたり…。

「船なら魚も釣れる。食いもんには困らん。嬢ちゃんは水だけはしっかりもっていきな」

…まさか、3食生魚とか言わないよね。

刺身食になれた日本人といえど、ほかほかご飯も醤油もなしに生

魚頭からばりばり食べられないんですけど。

「1日あればつくべ」

よくわからないまま、おそろおそろ船に乗り込む。

薄い板は俺の体重程度でもぎしぎしいった。

もじやもじやが乗るとさらにぎしぎしいった。

おいおい、大丈夫か。

木製の頑丈そうなおールが船の底からやったら太い腕に拾われて、ちよこんと真ん中あたりに腰を下ろした俺を両足で挟むようにもじやもじやが座った。

鞆をしっかりと握りしめて、言われるがままに板の上にしっかりと捕まって座る。

あれだ。どんな舟かという公園のデートコースの代表作、恋人用ボートってのが正確だと思う。

大きくはないし、どこまでもシンプル。

で、これで外洋渡ろうとしてる俺ってなに。

だからといって、あと8日も待つなんて、無理。

「お、お願いします・・・」

「おう」

ぐいっとオールを動かした瞬間、えらい勢いで舟が進み始めた。

「ひいっ」

なんだこれ。なんだこのスピード！

ありえないし！！

壊れる。舟壊れる！

ぎしぎしいったるし、水しぶきすごいし・・・！

「うわっぶ・・・！」

げほげほ、みず、水飲んだ・・・。

「べっぴんさんは水あびてもべっぴんさんだなあ」

あははとか笑うなー！このもじやもじや星人！！

これに1日！？1日乗るとかありえないから！！

ほんつと無理！！

「お、べっぴんさん、そこに魚がいるからうけとってけれ」

「は!？」

思った瞬間に、魚が頭から落ちてきた。

ど、どっから落ちてきたんだよ!

「ほーれもう一匹!」

オールか。オールですくいあげてんのか。

なんかもう、色々突っ込みどころありすぎて突っ込めねえ!

どうなってんだ、このもじゃもじゃ星人!

「なかなかうまいぞー、べっぴんさん」

なんかもう、水はかぶるわ、魚は落ちてくるわ、舟は早いわ、酔いそうだわ、どうしろってんだ。

ああ、いつそキレてえ。

こんな衝動、中坊のとき以来だ。

くらくらするほど脳に血が集まってるのがわかる。

あ、やべ。気絶するかも。

これってどうなんだ。気絶したらやっぱり舟から落ちるのか。

そんなことを思いながら、真っ暗になっていく視界にしようがねえ、と目を閉じる。

こんなんで気を失える俺の身体ってほんとどうなってんだろうな。

たどりついた港町

いやはや、えらい目にあつた。うん。

あの後、目を覚ましたときには岸だつた。

夜もとつぷり暮れていて、どうやらぐっすり眠つたらしい。

目の前にはもじやもじや星人がでかいびきでひっくりがえつてゐる。

舟の中で眠つたせいで身体ががちだつた。

ぐーっと身体を伸ばして吸い込んだ空気は・・・なんだかよどんでいる。

そりやそうかもしれない。すぐそばに見える街の空はやや曇っているし、水路は汚いし・・・。

そこはかとなく漂う悪臭に顔をしかめて、とりあえず潮でべたべたしている髪や服をささつと整えた。

「あの、ええと・・・」

なんて名前だけつか。このもじやもじや星人。

「ロボ、さん？」

じゃなかつたっけか。たしか。

「んあ？おー、目が覚めただな」

「はい。ありがとうございました。私、行ってこようと思います」

「行ってらっしゃい。ここで待つてゐるからな」

「はい」

帰りもこの舟かと思うとげんなりしたが、ここまで運んできてもらつておいて文句はいえない。

ぺこりと頭を下げて鞆を握りしめて歩き出した。

目指すところなんて決まっている。領主の館だ。

間違はなくこの街で一番でかくて目立つ建物を探せばいいのだから楽勝。

街の入り口でパンを買つて間に具材を挟んでもらつて簡単な朝ご

飯を終える。

うわ、この焼き魚と葉っぱにソースかけたやつ、うま。ちよつとぶりみたいな油ののった魚をちゅくくていい香りの葉っぱをいっぱいしきつめた上にのせて酢みたいのをかけてある。酢っていつでも酸味はあるけど酸っぱくない。パンも塩味がきいててうまい！

なんか、俺この世界にきて初めてうまい食べ物と出会ったかもってぐらいうまいぞ。

この世界、パンもちよつと堅めでしつとりしてんだよな。そこにソースと魚の肉汁がしみこんでいてこれまたうまい。

まぐまぐと最後まで食べきったら気合いも入ろうってもんだ。

「あのね、おじさん」

「なんだい、お嬢ちゃん」

「この街の領主様のお城を教えてくれる？」

「領主様？ああ、その高台にある赤レンガでできたでっかい建物だよ」

「ありがとう」

ぺこんと頭をさげて、うう我ながら気持ち悪、と心の中でつぶやきながら小走りに階段を駆け上がった。

きよろきよろと見渡す街は色あせた壁に彩られて少しくすんで見える。その中に時折、まだ塗られたばかりの鮮やかな色がまじって、まるでポスターや絵はがきを見ているような気分だった。

——大きな通りが多いのは新しい街だ。戦争に備えなくていい頃に発展した街だよ。逆に細い路地が多い街は戦争のために作られた都市だ。細い路地は兵士がたくさん通れない。両脇に高い建物があればその上から熱湯や石で攻撃できる。

そう教えてくれたのは父だった。

こっちの、フロルの父。

溺愛する妻にそっくりの息子を本当に可愛がってくれた。

けれど、それは母親のようにべたべたに甘やかすのではなく、社会の中で生きていけるように育てようという意志を感じた。

仮にも王族である以上、立場を考えて行動できるようにという願いがそこにはあった。

そんなことを思い出しながら高い建物を見上げる。

すくなくとも、本拠地を守らなければならない街ではあったらしい。

だが、それもここ最近では平和で流通のための大きな通りを造り始めた。そんな印象を受ける。

さらに街のここここに休憩できるような広場や屋台があるのだ。

領民の心もがっちりつかんでいるとは・・・やりての領主だなあ。

さて。ここからが勝負だ。

身なりを確かめる。うん。汚い。けどまあ仕方ない。

手持ちの札・・・大丈夫。鞆のすぐそこに父の手紙が入っているし、印章は右手にはめた。

戦闘準備は完了。

思わずネクタイを締める手が伸びたけれど、そこにはリボンがあるだ・・・け・・・うれしくない。

いぞ。

リンゴーンと重い音がしてほぼずぐ、扉が開いた。

頭を下げるのはなでつけられた髪にぴしつと整った黒服の執事。いたいた。この前まで家にいた。

汚い身なりの少女にも丁寧に接するあたりがいい仕事してるなあ。「どちら様でしょうか」

「初めまして。わたくし、領主さまにお会いしたくて参りました」につこり笑顔で丁寧に頭を下げる。

「お約束は」

「ございません」

「ではお引き取りください」

ここで引くんじゃ元営業の名前がすたるでしょう！

「失礼します」

閉じようとする扉にするりと滑り込ませたつま先に執事が気をとられた隙に身体を滑り込ませる。

「待ちなさい！」

待てるか。

何事かと出てきた使用人たちを交わして階段を駆け上がる。

だいたいこういつた建物の構造なんて似ている。

主人のいるところに見当をつけて廊下を曲がり、伸びてくる手をかいくぐり、後ろの悲鳴を聞きながら目的の場所にたどり着いた。蹴りあけるようにしてあけた扉の向こうにいた男にようやく息をつく。

驚いたように立ち上がる男の指には印章がある。

そして、驚いたように見えても油断ない目つき。

30になったばかりだろう。若さの中に落ち着きが見て取れた。うん。間違いなく当主だ。

「何事だ」

「申し訳ありません、旦那様。今連れ出しますので」

「あたくしにさわらないで？失礼な人ね」

なるべく母の口調を真似してみたら、ぎよっとしたように執事が動きを止めた。

執事だけじゃない。年齢が上と見えるメイドたちもだ。

「そのあなた、あたくしの顔に見覚えがあつて？」

くい、と顎をあげて男を見つめる。

そのままうつすらと笑った。

あれだよな。飲み会とか忘年会の余興とか、学生のノリでやる女装と大してかわんねえよな。

「お、お嬢様・・・」

ざわめく使用人たちに顔をしかめて立ち上がった男——男爵が陰しい顔で俺の前に立ちはだかる。

「姉は死んだ。お前は亡霊か？」

「そうともいうわね——亡霊でなくて申し訳ない、男爵。私はフロル。フロル・マナンティアル。突然の訪問の無礼を許せ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・つ」

男爵の顔が一瞬で蒼白になり、真っ赤になり、平然とした。だが、その目には強烈な怒りがたたえられている。

そりゃそうだな。俺だって怒る。こいつ、うちを謀反の罪に巻き込みに来やがったのかつて。

「頼りにしてきたテホンが病でな」

「そうか」

「しばらくの間おいてもらうぞ」

「——冗談はやめていただく。あなたはすでに王族でもなければ、当家になんの関わりもない」

「残念ながら、陛下はそう思われない。母の血筋にして我がここにいれば関わりはあると考えよう」

「あなたの母がそう言ったか」

「いいや。だが、テホンの周囲にいた人々はここが母の実家と言った。ならばそれは真実であろう。民草は嘘をつかぬ。少なくとも、政治向きのことはな」

「ならば教えてやろう。駆け落ち同然に縁談を蹴って飛び出した女とはすでに当家は縁が切れている。他でもない殿下が手切れ金をくださったのだからな。お引き取りただこう」

「その父も母も亡くなった。あるのはただ、私に流れるこの家の血だけだ」

できるだけかつこよく見えるように、にやり、と笑う。

「私になにもせずここまで来た？」

「ちょうど良いタイミングで来客を知らせる音になった。

「何をした？」

「出してみればわかる」

執事に目で出るように示した男が扉から外を伺う。

扉の向こうにいたのは、そろいの制服に身を包んだ男たち。

白のサーコートは王宮直属の近衛騎士の制服だ。

しかもその上から武装している。

何事もない顔で男が扉の外に出た。

俺だつてここで捕まりたくない。これはあくまで脅しなのだ。

さつさと身を隠す。

「これはこれは。いかがなさいました？」

敬礼した男たちが鋭い目で廷内を見渡しているのが見えた。

ちなみにここの敬礼は額にあてるんでも手をあげるんでもなくて、胸に握り拳を当ててかかとをびしっとそろえるパターンだ。要は剣をすぐには持てませんって示すだけ。だから貴人が目の前にいるときはずっとこの姿勢を崩せない。

「このあたりで銀の髪の少女をみかけたとの報告があつた。心当たりはないか」

「銀の髪の少女。はて知っているか？」

「いいえ、存じません旦那様」

しれつと答えた二人に探るような目を向けた騎士たちが目配せをするのが見える。

「お尋ね者の可能性がある。見かけた場合や心当たりがある場合はそうそうに渡すのが得策であろう。特にそなたはな」

「肝に銘じております」

「すでに廷内に入り込んでことはよもやあるまいな？」

「そのようなものがおれますれば即ご連絡申し上げます」

「そのように願いたい」

よし。勝った。

これで当主は俺を突き出せない。

俺が捕まれば一蓮托生。俺がすでにこの廷内にいたと証言した瞬間にこの家も謀反の罪に巻き込まれる。ま・・・死体にされて海に投げられるとかはあるかもしれんが・・・。

「・・・やってくれるな」

戻ってきた当主が引きつった顔で俺をにらみつけた。

「ちよつとちよろしうしてただけだし」

そう。ちよつと町中を見つかりやすいようにうろろしただけだ。

しかも、何回か領主の家を聞いたりしただけ。

「要求はなんだ」

「本当かどうかわからない謀反の罪で殺される筋合いはない。だが、今更王族やら貴族に戻ってどうこうしようとも思わない。…できれば、商人になりたいと思っている」

「商人!？」

その顔には王族のおまえにできっこない、とくつきり書いてあるところがつこい、俺は王族である前に営業マンです。

「この年で、見つからないようにして商売をするには後ろ盾がいるそれに、金があればそれが自分を守ってくれる」

大金を動かす商人になれば外国に逃れることだって出来るし、兵士たちだっておいそれと手出しできなるなるはずだ。

「商売のいろはもわからんのか」

「だからそれを頼みに来たんだけど」

この世界の商業ルールがわからないのに意地張って一人でがんばって仕方ないだろ？

使わずに済んだ身分証明書をよけて、かばんからメモ帳を取り出す。

ほしいものを事前にリストアップしてきた。

「経験のある商人である程度信用がおける人物。従業員の募集をしてくれる場所。資金。…という要求だ、これは…」

「俺が商売を表立ってやるには幼すぎるし、取引の常識もわからない。なにより、伝手がなくてうまくいかない。だから、伝手のある子どもと見てたまさない、ある程度経験もあって商売が出来る人を表に立てたい」

「……………言い分はわかるが」

「こんな子どもじゃ信用されないってのはよくわかってるけれど、出資者として意見を言わせてもらうぐらいのことは出来るんじゃないかな？」

あとはこっちの経験値と仕事っぷりで判断してくれるだろう。

「そんな都合の良い人材がそうそういてたまるか」

「今までどこかの商家にいて新しく独立しようって人間だったら捕まえられるんじゃないか？」

一瞬黙り込んでから、ああ、と息を吐き出した。

「意外と知恵が回るな。あの女の息子にしては」

いや、言われても仕方ないとは思いますが。

「見た目が同じだからといって、中身まで同じとは思わないでください」

どうしてあの父親が母を選んだのか本当に理解できないのだから、まったくんでもない人だったのだから。

子どもが勉強しようとしたらいやがるってのはどういつう見た。

「そのようだ。…フロルだったか」

「ええ。フロル・マナンティアル」

「…その名も、変えるべきだろう」

お、少し乗り気になってきたか。

「変えられるものならぜひ」

誰がお花ちゃんとか呼ばれてうれしいんだ。

こちとられつきとした日本男児。お花ちゃんは勘弁してくれい。

「フローラ」

「は？」

「フロリア、フロレンス、フロレンシア」

「…嫌がらせか」

花はいやだというとるに！！

「だが、女として生きていくのなら女名が必要だろう」

「は！？俺は男ですが！」

「だが、少なくとも、男の姿でいるよりは生き延びられる。まあ、誰も疑わないぐらい見事な女装だし」

たしかに、ちょっとお目にかかれないぐらいの美少女あるのは確かですが。

うれしくないって！！

「フローラにしておこうか」

いやだ。いやだ。俺は男だ。フロルだけでもいやなのに、なんでフローラ…。

「じゃあどんな名前がいい？」

「……………」

いやあ、もう。男の名前ならなんでも。

かわいらしくない名前ならなんでも！

「フローラで」

喧嘩うってんのかこのクソじじい。

「まあ、絶世の美女と歌われた中身からっぽ女そっくりの美貌を持つ裏切り者のフロル王子と同じ髪と目の色の美少女フローラなんて疑ってくれと言ってるようなものだがな」

あ、こいつ鼻で笑いやがったよ？

感じ悪い…。

「ぜったい逃げ切ってみせるから」
くそう。ただで死んでたまるか。
逃げ切つてやるとも！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6492o/>

異世界でシムシティ。

2011年4月19日14時24分発行